

寺町散歩（4）萬年山此経院三寶寺

史談会幹事 村崎春樹

- 崇福寺 寛永6年(1629)
- 光源寺 寛永8年(1631) 長崎奉行馬場三郎左衛門
- 長照寺 寛永8年(1631)
- 禅林寺 正保元年(1644) 長崎奉行馬場三郎左衛門

この間の長崎奉行長谷川権六と後の馬場三郎左衛門が積極的に仏教寺院の創建を支援した事が窺える。

同寺本尊矢負の弥陀伝説は、『長崎市史地誌編第四節』にいわく。今は昔、相州鎌倉の或寺院にこの阿弥陀如来の像が祀られてあった頃、故ありてその寺の領有なる田地が他人の手に奪われて、為に財政上の困難に陥った。然に其の後、毎秋の頃になると一人の沙弥が何處よりともなく現はれ来りてこの田を荒らしその踏む所の稲は悉く腐朽して収穫は皆無となるのであった。田主は之を知りて大に怒り、一夜弓矢を携へて沙弥の来るを待ちうけ矢を放ちて之を射た。沙弥は大に驚き矢を負ふたまま逃げ去った。依て田主は逃がしはせじと之を追跡せしに沙弥は走って或寺に入った。田主はそこで之に続いて同寺に入り、普く探したけれどもそれらしき沙弥が居ないので之を寺僧に問ひしに、寺僧も知らずと答へた。田主は不思議に湛へず、ふと壇上の阿弥陀如来の尊像を見れば、こはそも如何に仏の肩頭にさきに放ちたる箭の射こまれてあるを認めた。是に於て田主は且つ驚き且つ、怖れ、遂にその田畑をその寺に返還して罪を阿弥陀仏に謝した。これ矢負の



弥陀と称される所以としている。同寺の山門は、元禄年間に建築され明治7年(1874)台風により大破したものを高見和兵衛が再建、更に大正8年

(1919)に高見和平が改築したものであったが平成11年に同寺平成新参道建設に伴い撤去され、現在の位置に新設されたものである。本堂は、木造瓦葺単層入母屋造で石壇の上にあり、屋根が上下二段となっているのが特徴である。又本堂正面には唐破風造の屋根がある。閻魔堂は、本堂前面左側に在り、庫裡と相対する位置を占めている。閻魔堂内には正面に十王(閻魔王、秦広王、初江王、宋帝王、五官王、變成王、泰山王、平等王、都市王、五道転輪王)が在り、閻魔王の背後に阿弥陀如来木像がある。閻魔堂左側に子供の歯痛、腹痛、又咳に靈験が在る「コンコン婆さん」といわれる有名な奪衣婆が祀られている。更に左側奥には今博多町から寄託された地藏尊像ある。十王像の後にある一間に入ると壁一面に地獄絵



閻魔堂左側に子供の歯痛、腹痛、又咳に靈験が在る「コンコン婆さん」といわれる有名な奪衣婆が祀られている。更に左側奥には今博多町から寄託された地藏尊像ある。十王像の後にある一間に入ると壁一面に地獄絵



図が描かれている。この絵の由来は不明。明治元年(1868)高見和兵衛が旧大徳寺鐘樓を移築したが昭和43年(1968)の19号台風にて倒壊した為、撤去されて現存していない。本堂と閻魔堂の間にある地藏は、明治維新後に同寺付近にあったものを集めたものである。慶応3年(1867)9月長崎警備のため幕府派遣部隊撤歩隊200余名の宿舍となったが、翌慶応4年(1868)1月長崎奉行と共に同隊は江戸へ帰った。

歴代住持

開基	轉譽故的	二代	法譽貞公
三代	高譽靈道	四代	深譽残貞
五代	顕譽嶺雪	六代	専譽受山
七代	称譽順量	八代	相譽嶺中
九代	頂譽無生	十代	騰譽靈専
十一代	諦譽嶺雲	十二代	麟譽伴龍
十三代	裕譽寛雅	十四代	禅譽龍天
十五代	一譽亮含	十六代	寛譽琬罔
十七代	清譽	十八代	量譽寛暢
十九代	聲譽頭応	二十代	戒譽恵暢
二十一代	性譽法観	二十二代	光譽秀文
二十三代	諦譽英心(現住持)		

同寺は、寺町通りに面し北隣は深崇寺に接し、南は浄安寺、これら後は風頭山を背負う。同寺の開基轉譽は元和の初め頃、中島川第一橋(現在の阿弥陀橋)の南(八幡町)に居住して、当時長崎に勢力を誇っていたキリシタンに対抗して熱心に仏教の布教を行い、多くの信徒を得た。キリシタン勢力の排除を計る時の長崎奉行長谷川権六は、轉譽を支援すべく現在地に寺地を与えた。轉譽は堂を建て、長州萩から持参した矢負の弥陀と称する阿弥陀如来木像を本尊とし、元和9年(1623)京都知恩院末寺となった。因みに、寺町通りにある寺院の創建時期を比較すると慶長から正保の約36年間に集中している。

皓台寺	慶長13年(1608)	寛永3年(1626)	現在地移転
大音寺	慶長19年(1614)	寛永15年(1638)	現在地移転
深崇寺	元和元年(1615)	長崎奉行長谷川権六	
延命寺	元和2年(1616)		
清水寺	元和2年(1616)	長崎奉行長谷川権六	
興福寺	元和6年(1620)		